Title	はじめに
Author(s)	康, 仁徳 小田川, 興
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.53 別冊, 2012.3 : 3-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4250
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

はじめに

北朝鮮の金正日総書記が二〇一一年末に死去し、その波紋が広がるなかで迎えた二〇一二年、東アジア情勢は激動含みの局面に入った。北朝鮮の後継者である三代世襲の金正恩政権の安定度が不透明であるうえ、今年が朝鮮半島情勢を左右する東アジアのリーダーが相次ぎ交代や選挙の試練を受けるスーパーイヤーであることが大きな要因である。

とくに、「強盛大国」をめざす金正恩政権の進路が注目される状況下、北朝鮮問題の解決と地域の安定を促すためには日韓米の緊密な連携と中ロの協力が不可欠であるという認識から、日本、韓国、米国、中国の専門家が講演・報告・討論を行った。本書は、聖学院大学大学院・聖学院大学総合研究所主催で二〇一二年二月二五日、東京・駒込の女子聖学院クローソンホールで開いた国際学術シンポジウム「東アジアの平和と民主主義――北朝鮮問題への協力体制：課題と展望」（助成：国際交流基金、後援：朝日新聞社）の予稿とシンポジウム記録をまとめたものである。

聖学院大学総合研究所は二〇〇二年一〇月に「日韓現代史研究センター」を設立し、二〇〇三年から毎年、「東アジアの平和と民主主義」という巨視的なテーマを掲げ、北朝鮮問題を中心に日韓関係

もサブテーマとする国際学術シンポジウムを開催してきた。二〇一二年の本シンポジウムはちょうど一〇回目の節目にあたり、北朝鮮新体制のゆくえと東アジア関係国の新たな位相や戦略が絡んで、朝鮮半島情勢が注視されるというタイミングでの開催となった。

シンポジウムでは、東アジアは中国の台頭に示されるパワーシフトに直面し、地域の新たな秩序をどう形成するかが最大の課題だとの指摘がなされた。金正恩政権の「先軍政治」による内政・外交・軍事・経済の現状、核・ミサイル開発の見通しや改革可能性が考察され、軍事的な緊張を抱える韓国との南北関係の展開について論議された。大統領選挙を控える米国の対北朝鮮政策のシナリオ、六者協議の再開から多国間安全保障協議へとつなげる道筋も考究された。拉致問題で国交正常化交渉が止まった日本が日朝関係を打開する方策も検討された。他方、北朝鮮への影響力を強める中国が金正恩政権の軟着陸を支援するとの見方や、経済支援で北朝鮮に接近するロシアの動きが報告された。一方で、東アジアでは歴史問題を巡って関係国の立場に対立やずれが目立つという地域安定の阻害要因の克服についても討論された。

シンポジウムの総括では、北朝鮮が改革開放に進むよう、とくに日韓米の戦略的な協力が必要であること、原爆と大震災を経験した日本は地域協力への新たなイニシアチブを発揮すべきことが強調された。

シンポジウムには日韓の政府関係者、北朝鮮系の在日学者、北朝鮮問題専門家たちが出席し、主要メディアの取材も含めて国内での本シンポジウムでは最多の一八二人が参加し、レベルの高い議論が展開された。

本書が、シンポジウムの目的である東アジアの平和形成と民主主義の実現に向けて問題解決への有効なステップを刻むことを期待したい。

聖学院大学総合研究所日韓現代史研究センター
康　仁　徳
小田川　興